

〔その他〕

小中学校の実習を通して地域で生活する子どもの理解

—「小児看護学実習Ⅱ」初年度の経験から—

澤田 和美* 奥野 順子** 石川眞里子** 日沼 千尋** 川口 千鶴**

UNDERSTANDING COMMUNITY BASED CHILDREN'S LIVES THROUGH A CHILD HEALTH NURSING PRACTICUM AT ELEMENTARY AND MIDDLE SCHOOL : THE FIRST EXPERIENCE IN "CHILD HEALTH NURSING PRACTICUM Ⅱ"

Kazumi SAWADA * Junko OKUNO** Mariko ISHIKAWA**
Chihiro HINUMA** Chizuru KAWAGUCHI**

東京女子医科大学看護学部小児看護学実習Ⅱは平成13年度より開講した。この実習は静岡県大東町の小学校5校、中学校2校で、学校で生活する子ども達の健康や地域との関わりで成長発達する子どもについて、実践的に学習することを目的にしている。そこで、初年度の実習における学生の学びについて報告する。

キーワード：子ども、小学校、中学校、小児看護学実習

ABSTRACT

This report is first experience of "Child Health Nursing Practicum Ⅱ" in 2001 at Tokyo Women's Medical University, School of Nursing. The object of this practicum course was to understand children's health and development in elementary school and middle school. Students learned children's lives and development in the community at Daito-cho.

Key words : child, elementary school, middle school, child health nursing practicum

I. はじめに

少子化と言われて久しい昨今、同時に子どもをめぐる問題として、いじめ、不登校、犯罪の低年齢化、児童虐待など多くの問題が表面化している。そして、地域で生活する子どもや家族の心の健康の重要性が注目されている。このような中で、小児看護では健康を連続的にとらえ、施設内看護にとどまらず地域で生活する子どもを看護の対象とする必要性が高まってきている¹⁾²⁾。しかし基礎教育の中で、これについて知識を中心とした学習は行われているが、実践的学習の機会は少ない。

一方、学校教育においても子どもの健全育成のために、

「開かれた学校」「地域社会と共に子どもを育てる」ことが、強調されてきている。このような背景の中、東京女子医大看護学部小児看護学実習Ⅱでは、学校生活を通して地域で生活する子どもの理解を深め、健康な生活の支援について考えることを目的とした実習を行った。初年度の経験を報告し、大東町における小児看護学の実習について考察する。

II. 小児看護学実習Ⅱの展開

1. カリキュラム

小児看護学は、1年次看護学概論で小児看護学について2コマの講義を受け、3年次には小児看護学各論2単位

* 東京女子医科大学看護学部非常勤講師 (Tokyo Women's Medical University, School of Nursing)

** 東京女子医科大学看護学部小児看護学 (Tokyo Women's Medical University, School of Nursing)

(30コマ)、小児看護学実習Ⅰ3単位(67コマ)、4年次には小児看護学特論1単位(8コマ)小児看護学実習Ⅱ1単位(23コマ)で構成されている。このほかに小児を対象とした学習としては、基礎看護学において大東町内保育園・幼稚園での実習を3日間行っている。

看護学部開学時に目的を以下のように設定して、これを基に学習内容を定めた(表1)。当初文部省(現文部科

表1 小児看護学実習Ⅱ 学習要項

概要:小学校及び中学校の保健室での実習を通して、健康な子どもへの理解を深め、また母子関係の重要性や子どもが家族(地域)の関わりの中で成長発達することを実践的に理解する

大項目	中項目	小項目
地域・学校における子どもの健康への援助の理解	1.小中学校における児童・生徒の学校生活	(1)成長・発達の特徴を基にした学校での生活 (2)健康教育と保健教育
	2.地域社会にある学校での健康推進	(3)保健教育の場、地域の関係機関との連携による児童・生徒の健康づくり
	3.小中学校における児童・生徒の健康問題の理解	(4)検診結果や資料などから児童・生徒の健康問題と対策 (5)保健室に入室する児童・生徒の課題と健康問題への対応と援助

学省)への実習施設の申請は、大東町幼稚園6校、保育園3校、小学校5校、中学校2校としていた。しかし実習の具体的な目的、方法を検討する中で、保育園での実習は小児看護学実習Ⅰ-1に移し、実習Ⅱを小中学校に絞ることで、「健康な小児への理解を深め、また母子関係の重要性や小児が家族(地域)の関わりの中で成長発達することを実践的に理解する」という学習内容を達成できると考え、文部省申請カリキュラム作成者に相談の上、大東町立小中学校7校のみを実習施設とした。

4年次大東キャンパス実習は、3週間を1クールとして地域看護学特論、地域看護学実習Ⅱ、小児看護学特論と組み合わせて構成されており、98名の学生を4クールに分け(1クール24~25名)、平成13年5月7日~7月26日の12週間で図1のように実施した。

2. 準備

1) 実習施設との打ち合わせ

平成12年7月の大東町教育委員会の校長会において、実習目標・目的、実習期間について大東町教育委員会および校長に説明した。この際、実習オリエンテーションの方法が検討事項となった。また大学側から、平成12年度の各小中学校の要覧、学校行事、保健便りの送付を依頼した。同年11月に大東キャンパスに教育長、大東町全小中学校の校長、養護教諭、東京女子医科大学看護学部長、小児看護学教員が一堂に会し、実習内容について協議の場を持った。ここで、実習時間、実習内容、欠席時の対応、通学方法、給食について決定した。

実習における学生配置数は基本的には各校各期間2名として、実習校の平成13年度行事予定を参照して、修学旅行などの宿泊行事等のある時は当該校の学生配置を避け、また児童・生徒の多い学校は3名、少ない学校は1名という案を作成して、大東町学校側と協議の上、決定した。

2) 事前準備および学習

学生が3年次である2月に小児看護学実習Ⅱの目標、

表2 小児看護学特論「学校と子どもの生活」学習内容

1. 学校保健の対象とは？
学校保健の2側面(保健管理、健康教育)
学校保健に関する法律
2. 健診(検診)の項目と実施時期
感染症・結核
3. 養護教諭の業務
・健康観察
・健康相談(ヘルスカウンセリング)
・保健指導
・保健学習
・環境衛生
・救急処置
4. 学童、思春期の特徴と学校において起こりやすい問題
心の問題に対する養護教諭の関わり
5. 養護教諭
6. 保健室
7. 養護教諭、保健室の機能の変化と期待
保健室登校
8. 学校保健組織(委員会)
9. 学校給食

実習グループ(学生数)	大東町 実習1日目	大東キャンパス1週目				大東キャンパス2週目				大東 3週目	小児看護 学特論
		2日目	3日目	4日目	5日目	2日目	3日目	4日目	5日目		
1クール 1グループ(11名) 2グループ(13名)	4月7日	5月8日	5月9日	5月10日	5月11日	地域看護学実習				地域看護 学特論	5月25日
		地域看護学実習				5月15日	5月16日	5月17日	5月18日		6月15日
2クール 3グループ(13名) 4グループ(12名)		5月29日	5月30日	5月31日	6月1日	地域看護学実習					6月6日
		地域看護学実習				6月5日	6月6日	6月7日	6月8日		7月6日
3クール 5グループ(12名) 6グループ(12名)		6月19日	6月20日	6月21日	6月22日	地域看護学実習					6月26日
		地域看護学実習				6月26日	6月27日	6月28日	6月29日		7月27日
4クール 7グループ(12名) 8グループ(13名)		7月10日	7月11日	7月12日	7月13日	地域看護学実習					7月17日
		地域看護学実習				7月17日	7月18日	7月19日			

図1 小児看護学実習Ⅱ日程

実習内容、実習校について説明をした。大東町での実習期間は大東キャンパス内フローラドミトリーに宿泊可能であり、寮内での生活については学生部長が説明を行った。

4年次小児看護学特論「学校と子どもの生活」(4月27日)では、学校保健に関する講義を行った。講義の概要は表2に示した。また、4月7日実習オリエンテーション(実習1日目に相当)で各学校において指示された持ち物、服装、更衣、通学方法、タイムスケジュールや留意点について、小児看護学特論の時間に確認した。

3. 臨地実習

1) 日程

実習1日目としては、平成13年4月7日に全員が大東町の各実習校へ日帰りで行った。各実習校の教育目標、実習施設、実習中の日程、行事など詳細について、実習校の教諭から直接オリエンテーションを受けた。また、このときに実習中の給食費の集金が行われた。

実習2日目～5日目は4日間連続で、火曜日～金曜日に行った。8グループのみ祝日(海の日)があったため、火曜日～木曜日の3日間の実習であった。

2) 実習内容

学生は、児童生徒の健康管理、健康教育、環境衛生、授業参観、児童生徒の休憩時間、給食、清掃などを通して学校生活での子どもを観察し、また実践に参加した。

健康教育・保健教育は、保健の授業の参観のみでなく、保健便りの作成やポスターの作成、保健便りの配布・説明、保健の授業の教材づくり、虫歯予防の学習への参加観察及び補助、初潮教育の企画・実践といった様々な形で実習をした。授業参観は学生の希望を取り入れて行われ、学年差、教科による違いなどについて学ぶことができた。さらに、特殊学級や外国籍の児童のクラスを参観することで、個別性を重視した対応および学習方法についても理解を深めた。また教室内学習のみでなく、校外学習や老人ホーム・保育園などの施設での学習にも引率参加する機会を得て、様々な学習形態について知ることができた。特にチームティーチング、総合学習などは学生自身が児童・生徒だったときには、経験していない学習形態も参観することができ、その特徴について学ぶことができた。また、地域特性として単学級、固定的な人間関係に対して行われている取り組みや工夫についても考えることができた。小中学校において「自ら学ぶ、自分でできる」という目標に向かって教育が実際に展開され、児童生徒がそれを体得していく様子を、学生は観察することができた。

さらに、保健室に来室する児童生徒との対応、保健室登校の子どもと接することで多様化する保健室の機能と養護教諭の役割について、学ぶことができた。特に中学校では、保健室登校の生徒との関わりを通して、一人一人の思いを聞く経験ができ、思春期の発達段階にある子どもと実際に関わる中で多方面から考察することができた。また特殊学級の教諭、心の相談員から話を聞く機会を得た学生は、それらの子ども達の背景や接し方について、さらに学びを深めることができた。

学校行事、実習期間によって、様々な実習内容を経験できた。5～6月は健診(検診)活動、健診結果の記録、6～7月は学校保健委員会、プールの水質管理や水泳指導などであった。

3) 実習における経験項目

実習中に経験できると考えられた項目をリストにして、実習要項に載せた。学生がこのリストにチェックした内容を分類整理した(表3)。項目についての学生の解釈が一定でなかったため、正確な数値としては把握できなかったが、概要をつかむことができた。

学校ごと、地域の特徴により、経験項目の違いがあった。これに対して、小児看護学特論「地域で生活する子ども達」のディスカッションで共有するように方向付けた。この結果、学生は自ら経験した学習内容と他校での経験とを照らし合わせ、学習内容を膨らませることができた。しかし、実習期間によって健診活動や学校行事が異なったことに対しては、特論のディスカッションを1クールごとに大東町での実習終了直後に行っていたため、実習期間が異なることによる経験の共有はできなかった。

4) 記録

学生は4日間の実習内容を毎日、「実施したこと、観察したこと」と「考察」に分けて記録した。また、出席確認のための捺印欄及び、実習校の先生方のコメント欄を設けた。実習初日は出席確認印をもらうため、その後は記録内容の点検ができるように毎日提出した。実習最終日の記録は提出ができないため、大学への記録提出後に実習全日分の記録をコピーして、実習校に持参した。

学生は記録に対する先生方のコメントを基に、どのように子どもと向き合っていくかといった示唆を得ていた。

5) 学習環境の整備

実習中は各学校ごとに、平成12年度からの各学校の要覧や保健便りなど資料一式、「学校保健マニュアル第5版(南山堂)」、申し送りノートを貸し出し、実習に持参させた。実習校への通学を通じて地域の子どもの生活を知

表3 実習における経験項目

実習内容 時 期	小学校 (5校)					中学校 (2校)				
	5/8~18	5/29~6/8	6/19~29	7/10~19	合計	5/8~18	5/29~6/8	6/19~29	7/10~19	合計
実習生人数	20	16	17	17	70	4	9	7	8	28
保健室来室 児童生徒の対応の見学	20	16	17	17	70	4	9	7	8	28
保健室登校児童との対応	5	6	4	4	19	4	9	7	8	28
養護教諭と児童生徒の健康相談の見学	15	9	6	10	40	3	6	4	5	18
養護教諭と保護者の面談の見学(同席せず)	4	7	3	4	18		3	1	2	6
こころの相談員との面談の見学						2	2	3	8	15
校内巡視	20	16	17	17	70	2	3	3	4	12
児童生徒の健康観察・健康観察表集計	20	16	17	17	70	4	9	5	8	26
連絡帳の記入						2	1			3
保健室施設の見学実習	20	16	15	11	62	4	9	6	8	27
保健室利用状況の資料閲覧	20	14	13	17	64	3	8	5	7	23
検診(健診)の見学	18	6	7		31	2	5	2		9
検診(健診)結果の資料閲覧	20	15	12	11	58	4	5	7	8	24
検診(健診)結果の記録	2	5	6	2	15	2	4	6		12
検診結果の保護者へのお知らせ記入	2				2					
教職員の検診(健診)の見学									1	1
学校保健委員会の傍聴(含他校の参観)				5	5			2		2
学校保健計画資料閲覧	17	12	6	10	45	4	7	5	6	22
その他学校保健関係の活動の見学	16			2	18	2	1	2	2	7
委員会活動の見学(含保健委員会)	7	8	1		16		5	3		8
保健の授業の参観	6	8	7	4	25		4			4
初潮教育(含実践)	4		1	2	7				2	2
体育の授業の参観	18	14	16	17	65	4	9	7	8	28
保健以外の教室内授業の参観	20	16	17	17	70	4	9	7	8	28
特殊学級授業見学・担当教諭から話を聞く	10	3	9	11	33	2	7	7	4	20
休憩時間の子どもの生活の観察	20	16	17	17	70	4	9	7	8	28
給食中の子どもの観察	20	16	17	17	70	4	9	7	8	28
クラブ活動中の子どもの観察	8	10	8	2	28					
部活動中の子どもの観察						4	9	6	4	23
保健便り作成	8	9	7	5	29			3	4	7
保健たより配布・説明、健康教育教材の実践	5	11		4	20		3	2	8	13
掲示物作成・健康教育教材作成	12	12	8	12	44	2		2	4	8
検体の準備(尿・ギョウ虫)	11				11	2				2
検尿の回収、確認、管理	5				5		7			7
修学旅行の説明会	2				2					
運動会前(応援)練習/フれ運動会	5	5	4	4	18					
交通教室・自転車講習会	4		5		9			1		1
全校生徒総会(臨時)、終業式						2			4	6
花壇の整理・草むしり	6	6		4	16					
老人ホーム・保育園見学		2			2		2	1		3
校外学習引率		3		5	8					
プール(含:清掃、塩素測定)		7	15	13	35		3	5	6	14
体力測定			2		2					
水泳記録会				2	2					
他校との交流会				2	2					

る機会にできる通学方法を計画していたが、季節的な問題及び学生の安全、健康管理の点から、実習期間中に雨天時の対応やバス通学のための補助を出すなどの変更があった。また服装についても、通学時にはスーツ等で、小学校では児童とふれあう機会が多いためカジュアルな服装（ジャージとポロシャツ等）に更衣するよう、実習中に改めて指導を行った。

また、図書館の利用では、地域看護学実習を含めた大東キャンパス実習期間中は、図書館大東分室の開館時間が午後8時まで延長され、学生の資料閲覧やコンピュータの使用が可能になった。

6) 教員の体制

教員は実習開始日と各グループの実習最終日に、実習状況の把握のために実習校を訪問した。当初、1名の教員が、すべての実習校訪問に当たっていたが、4グループ目から複数の教員で分担して訪問した。教員が実習開始時間から終了時間まで、対応できるように実習日は宿泊する体制で臨んだ。教員はドミトリーに学生と同様に宿泊し、夜間帯も必要時学生の相談にも応じる結果となった。

また、2グループ目からは、学生が実習終了時に実習先から大学に電話連絡して、実習状況と実習終了を確認する体制を導入した。

4. 実習のまとめ

3週間の大東キャンパス実習から帰京した翌日の金曜日午後の2コマで、特論「地域で生活する子ども達」を実習のまとめとした。実習期間と実習施設が異なる8~12名の学生で編成して討議した。

この実習のまとめの話し合いの前に、表4のディスカッションのポイントを学生に提示し、これにそって学生はそれぞれの体験を発表した。

表4 小児看護学特論「地域で生活する子供達」
ディスカッションのポイント

・子どもの生活	授業、休み時間、登下校、学年による違い
・健康管理	健診活動、健診の記録 環境衛生、救急処置 給食
・健康教育	保健学習、指導、ほけんだより・ポスター
・保健室の機能	
・養護教諭	どのように子どもと関わっているか 家庭との関わり、他の先生との関わり
・子どもの人間関係	子ども 対 子ども 子ども 対 大人(先生)
(1)上記の項目のうち、実習中の心に残ったエピソードの事実と考えたことを明確にして5分程度で発表する。	
(2)各学校で経験した内容が異なるので、特徴的なことについてあげ、それを共有するように工夫をする。	

討議内容としては、子どもが保健室を訪れる理由が小学生と中学生では異なり、年齢が上がるにつれて心の問題が多くなっていること、特に小学校高学年から中学校ではいわゆる「保健室登校」の児童・生徒がみられ、誘因には家族関係など複雑な背景があること、その対応は個別にとられており、「心の相談員」なども加わり多職種が関わっている場面や、教職員と家族の連絡や相談の場面では地域ぐるみで子どもを育むことが実感できたとの報告がされ、家族関係や地域社会の現状と課題についても考察していた。

また、子どもの健康や子どもの看護について、健診(検診)に関わったり「保健だより」を作成した体験から、学校での健康管理、健康教育の実際がよく理解できたという報告や、前後して行われた地域看護学実習Ⅱにおける保健センターの実習を踏まえ、保健婦と学校との連携や多職種によって地域の中で子どもの健康維持・増進がなされ、育成されているという実感を持ったとの報告もされた。その他、3年次の小児看護学実習Ⅰで受け持った疾患を持つ児と今回の実習で観察した学校で生活する児と比較して、子どもが本来持つ活発さや健康な生活について再確認し、3年次の自己の看護を振り返り、子どもにとっての望ましい入院環境や生活援助について考えたという発言が多くあり、既習の小児看護学と統合し、子どもの看護について深めるディスカッションを行うことができた。

さらに人口2万人程度の大東町には農業地域、商業地域、住宅地、企業が集まる地域、外国人労働者の多い地域との地域特性があり、また放課後の習い事の実態や遊び場が少ないことなど子どもの環境や生活が出され、現代社会における子どもの実態と大東町の子どもの生活との共通性や特殊性についても討論された。

このまとめを通し、現代社会の抱えている様々な問題が、学校生活で表面化している現実を直視し、そこに関わる学校、家庭、保健医療職との連携を学び、広い視野で社会構造や時代と子どもとの関係について理解を深めることができた。

5. 実習運営の評価

実習のまとめである特論「地域で生活する子ども達」の後、学生を対象に任意のアンケート調査法で実習の評価を行い、98名中85名(86.7%)の協力を得られた。項目は、オリエンテーション、事前学習、実習内容、大学側教員の体制であり、結果は別紙の通りであった(表5)。実習目的に関する2項目について85%以上の学生が達成できたと考えていた。実習のまとめも95%が実習

の理解を深められたと回答していた。また、講義「学校と子どもの生活」に関する質問に「役に立たなかった」と回答した学生は、実習時期と講義が1ヶ月以上間隔のあったものが多かった。

表5 学生アンケート結果

質問内容	はい 名 (%)	いいえ 名 (%)
実習を通して学校(地域)で生活する子どもの理解ができましたか?	83 (98%)	1 (1%)
実習を通して子どもの家族関係を考えることができましたか?	72 (85%)	13 (15%)
まとめの話し合いで、地域で生活する子どもについて理解を深めることができましたか?	81 (95%)	3 (4%)
4月7日の大東町各実習場所オリエンテーションは、実習をする上で役立ちましたか?	69 (82%)	14 (17%)
小児看護学特論4月24日の「学校と子どもの生活」は実習をする上で役立ちましたか?	63 (74%)	21 (25%)
実習中「学校保健マニュアル」「実習校の資料」「申し送りノート」は、役に立ちましたか?	81 (96%)	2 (2%)
実習中に大学の教員にしてほしいがありましたか?	14 (17%)	69 (82%)

さらに、実習校の養護教諭、校長、教頭、教務主任、その他の指導にあたった先生を対象に改善点を明らかにするために、記述式のアンケートを依頼した。改善点としては学生の人数配置が上がり、現行では小中学校側、特に養護教諭の負担の多さに関する指摘があった。肯定的な評価としては、学生の実習は、児童・生徒達が多くの人と関わる機会となり、社会的な発達の一助になった等であった。

Ⅲ. 考 察

1) 小児看護学実習としての学び

既習の小児看護学実習Ⅰ(3年次)との関連に関しては、疾患を持つ子どもと接した体験と比較し、疾病や入院生活が子どもの成長発達に及ぼす影響を再認識する機会となっていた。まとめの話し合いでの学生の報告に加え「病院で入院していた子どもが地域ではどのように生活しているのかを、実際に知り考えることができた」「病院で、退院後の生活を考えているつもりだったが、学童期の子どもの生活はほとんどが学校生活であり、こういった生活に戻れる援助の必要性を感じた」という学生の記録からも明らかなように、疾患を持った子どもが健康を回復し、また疾患の治療を継続しながら病院から退院して地域での生活に戻るときに、どのような援助を行うことが望ましいかを学んでいた。

学生は保健室、教室内活動、休憩時間、給食の時間に子どもと接することで、子どもの発達段階にあわせた対

応について考え、工夫しながら働きかけをしていた。小児看護学実習では、子どもの発達段階にあった対応を体得できることを目標としているが、学生は小中学校において異学年の複数の子どもと接することで、学習できたと考える。

大東町において小児看護学と同時に進行されている2週間の「地域看護学実習Ⅱ」では健康教育を実践しており、それらの知識や体験を基に、子どもを対象とした健康教育について深めることができた。また、地域看護学で乳幼児健診などの母子保健事業を経験しており、これが就学を期に学校保健に受け継がれていくこと、さらに地域の保健センターと学校との繋がりも学んでいた。これらを通して公衆衛生行政において、従来から問われている縦割りではない連続性のある地域保健と学校保健の実践を学習することができた。

2) 大東町における実習

学生は大東町で実習することに関して、3年次にはどこで宿泊し、どのような形態で行うのかを心配して担当の教員に相談に来たこともあった。しかし、大東町で4月7日に各実習校に関して、またその後に宿泊施設の見学また利用法の説明などを受けたことによって、3週間の連続実習や生活のイメージを具体的にすることを可能にした。

地域看護学と小児看護学の3週間の連続実習で大東町内、あるいは周辺地域について学習を終えた後、学生から「1年生の時は生活していただけだが、この実習を通して初めて大東町が見えてきた」という発言が聞かれた。このように、4年次の実習を通して1年次に自分たちが生活した大東町の住民や子どもがどのような生活をしているか、どのような健康政策がとられているかについて地域の特性と関連づけて実践的に学び考えることができたようである。これは、単にキャンパスが大東町にあるという以上に、学生が大東町と周辺地域をフィールドとした健康に関する学習をすることによって、学生のみならず看護学部と大東町との有機的な結びつきが深められたと考える。

医療政策が疾病指向から健康指向(ヘルスプロモーション)に転換をはかり、施設内医療から在宅医療へと医療保険制度が変化している過渡期に、学生は大東町を通して、小中学校を含めた地域の中で健康を保持し向上する実践活動を学習することができた。

3) 学ぶ姿勢・態度

学生は実習校で、学生としてではなく一人の大人、教員として尊重されていた。それまで看護学生として病院

を中心に実習してきた医療者によって実習指導をうけてきたのとは異なる自覚と責任を持つことができた。また、養護教諭、校長、教頭、教務主任のみでなく、各担任の先生の教育的な指導に触れ、自主的に学習の機会を広げていくことができた。反面、学習意欲の低い学生は自分で課題を見いだすことができず、受け身的な学習にとどまり、学習成果も少なかった。

実習期間中に大阪府内の小学校の乱入事件が発生し、実習生の小中学校への出入りについても一考したが、大きな問題もなく実習を続行することができた。

稿を終えるにあたり、開学後初めての实習であり大学側教員も手探りの中、実習の準備、運営において全面的にご理解、

ご協力を賜った大東町教育委員会ならびに各小中学校の養護教諭、校長先生、教頭先生をはじめとする諸先生に深謝いたします。また、実習準備期から実習中に渡り、暖かく支えてくださった東京女子医科大学大東キャンパス事務室長佐々木氏、長谷川氏、溝口氏、桜田氏、前事務室長渡野辺氏、図書館大東分室司書中山氏、岩倉氏に心より感謝いたします。

文 献

- 1) 及川郁子：21世紀に向けた小児看護の課題—子どもと家族がよりよく地域で生活するために—。日本小児看護学会誌, 9 (1), 26, 2000.
- 2) 村田恵子編著：病いと共に生きる子どもの看護. 72-80, メディカルフレンド社, 2000.